

川上 勉著

『ヴェイシー政府と国民革命——ドイツ占領下

フランスのナショナル・アイデンティティ——』

剣持 久木

第二次世界大戦期のフランス、いわゆる「占領期」のフランスについては、近年日本語で読める文献が飛躍的に増えてきた。二〇年前には、わずかにクセジュ文庫等の邦訳書数点のみであったことを考えれば隔世の感がある。もちろん、わが国におけるフランス占領期研究の遅れは、当の本国の事情を反映したものであることは間違いない。占領期のフランスについては、長らくレジスタンス史観が支配的であった事情が知られてからすでに久しい。外国人研究者の研究をきっかけに実証的な研究が本格的に始まったのは七〇年代に入ってからのものであり、それがフランス人一般の歴史認識に一定の影響力を発揮するのは、八〇年代に入ってからであるから、その意味ではわが国への紹介しないしは研究が、評者を含め八〇年代後半以降になるのはごく当然の事情ではある。

評書
ところで、フランス本国はもとより、わが国においても、占領期という時代への注目自体はずっと以前から存在していた。いわゆる「レジスタンス」への眼差しであり、基本的に文学研究者がその担い手であった。とりわけ、わが国においては、歴史研究の

対象としてのフランス占領期が八〇年代以降に注目されるずっと以前から、フランスにおけるレジスタンスの存在は大きかった。

とはいえ彼ら文学研究者たちにも、当然フランス本国での、研究対象のシフトの影響はあるわけで、レジスタンスの対極、コラボつまり対独協力文学者の紹介ないし、研究も近年では行われるようになってきた。ただ、わが国における現代フランス研究は、レジスタンス紹介華やかり頃から、文学（あるいは哲学）研究者が先行しており、歴史研究の方が後手に回っていたことは事実である。とりわけ、これはフランス現代史研究の対象として注目されて久しい「知識人」へのアプローチについては顕著であると思われる。さらに、ある意味では戦前と戦後の連続性を担保していた、（レジスタンスでもコラボでもない）ヴェイシー派知識人についてはこれまで殆ど省みられなかったのが実情である。評者も微力ながら、歴史研究の立場から、この間隙を埋めるべく、占領期研究の中で「知識人研究」の意義を論じる機会があったが、このほど、フランス文学研究の側から、ヴェイシー派知識人を論じる本格的な書物が登場した。著者の川上氏はこれまで、十年以上にわたって紀要に発表してきた論文をもとに上梓されたようであるが、残念ながら論文発表時には歴史研究の側には殆ど注目されず、専門的関心がおそらくもとも近い評者すら不明にも、数年前まで著者の存在を存じ上げていなかった有り様である。

文学研究と歴史研究のセクシヨナリズムを嘆いても今更はじまらない。本稿では、当該書物の紹介、批評を通じて、「知識人研究」をめぐる、文学研究者と歴史研究者が今後は、より生産的な緊張関係を持てるよう提言したいと考えている。

本書の構成は左記の通りである。

序章 いま、なぜヴィシーか

第一章 国民革命をめぐる言説

第二章 同時代の知識人の言説

第三章 「国民革命」論の系譜

第四章 知識人とアイデンティティの相克

本書のテーマは、副題にもあるように、占領期フランスのナショナル・アイデンティティとしての「国民革命」の研究である。その際、思想としての国民革命を唱えた知識人たちが主な研究対象となっている。以下まず内容を紹介していこう。

序章では、当該時期の概観と問題提起がなされている。一九四〇年夏、ドイツ機甲師団の電撃戦の前に休戦を余儀なくされたフランスに、前大戦の英雄ベタンを首班とするいわゆるヴィシー政権が成立する事情は既によく知られている。著者は、ヴィシー研究の意義を、アンリ・ルソーをひいて、戦後のフランス社会に長い傷を残したのをもみても、「出来事の重大性」をどれだけ存続したかという「時間の尺度」だけでは計れないと指摘する。第二次世界大戦は、ドイツ、イタリヤ、日本のような戦敗国だけでなく、「戦勝国」フランスの戦後にも深刻な影響を与えたのである。本書のメインテーマ「国民革命」については、「自由、平等、博愛」に代えて「労働、家族、祖国」というスローガンが採用されたことが端的に示すよう、フランス大革命との対比で説明されている。「ドイツ軍の占領下でフランスの再建という困難な課題を遂行するためには、一七八九年のフランス革命とは規模も形態も違った、国民的な統一と団結を訴え」る必要があった。なぜなら、ヴィ

シー政府の反ユダヤ主義的歴史認識によれば、「ユダヤ人が主導した」フランス革命は「フランス国民の革命」ではなかったからである。さらに著者は、ベルナルル・アンリ・レヴィの挑発的な表現「『国民革命』とは、フランス革命に代わる正統的なもう一つの革命にはかならない」を引用し、いまなぜヴィシーなのか、と問うことはフランス革命以来二〇〇年以上続いた近代社会の自由、平等それに民主主義といった理念の実態を今一度再検討することであると述べている。

第一章では、まずヴィシー以前の「国民革命」言説が分析される。イデオロギーとしての国民革命が、シャルル・モーラスに多くを負っていることは事実であるが、言葉としての「国民革命」は、モーラス主義のヴォキヤブラリーではない。モーラスはもちろん、ベタンも「革命」という言葉を嫌っていたのである。川上氏は、ベタンの側近デュムーラン・ドウ・ラバルテートを引用して、言説としての起源を一九二〇年代フランス・ファシズムの代表格ジョルジュ・ヴァアロアの著書『国民革命』に求めている。さらに、ヴァアロアに続いてピエール・テタンジュの愛国青年同盟が一九三三年に突然「国民革命」を機関紙に載せている点が指摘されている。

ついでヴィシー期におけるベタン元帥の演説の中にみられる「国民革命」が時系列的に分析されている。一九四〇年一〇月の時点で「フランスの再建」と「国民秩序の回復」をめざす総路線として提起され、「強力な国家の形成」と「階層化された社会」の実現をはかる、上からの革命の指導理念として打ちだされた「国民革命」スローガンは、一九四一年のあいだは、ベタンによ

って「理念」から「実践」へと「国民全体」にむけて、ひたすら呼びかけられた。しかし一九四二年になると「国民革命」の「敵対者」が国民各層にあらわれ、ベタンは知事や「軍人同盟」を「国民革命の道案内人」と称して、これら「親衛隊」へ依存する形で「国民革命」を推進しようとする。さらに一九四三年には「国民革命」を「国民革新」と言い改めて今一度国民の再結集をはかるうとするも、すでにレジスタンス運動の活発化の前に、ヴィシー政府の影響力は大きく後退していた。最後に、「国民革命」における「労働、家族、祖国」のスローガンの役割が、当時のパンフレットから分析されている。三つの標語の中でもとりわけ「家族」が重要視されていたことが指摘されている。

第二章は、国民革命を唱道した三人の知識人の言説を分析しているが、質、量共に本書の中核を構成している。最初に俎上に上げるのは、第一次大戦以前の青年期から一貫して保守派の論客として知られるアンリ・マシスである。第一次大戦前夜のナシヨナリズムを反映した『今日の若者たち』以来、一貫してマシスが追求してきた「フランスの再建」は、一九四〇年にフランスがドイツ軍の前にあつてなく敗北した時に、誰にも明らかな共通認識となった。その状況のなかで、担ぎ出されたベタン元帥をささえたイデオログの中心的存在が、まさにアンリ・マシスであった。

著者は、ヴィシー・イデオログとしてのマシスの思想と行動を、一九三五年のエチオピア侵攻に際してのイタリア制裁に反対する宣言『西欧の擁護のための宣言』から一九四四年八月のベタンの最後の演説の草稿執筆に至るまで跡付けている。とりわけ一九四一年三月に刊行された『思想は残る』は詳細に分析され、マシス

の思想がすべてカトリシズムへと収斂すると結論づける。「西欧文明の再建のためには、ギリシャ・ローマ文明の伝統とキリスト教の英知によるしかない」のである。

ついで検討されるのが、一九三〇年代の代表的「非順応主義者」^④の一人、テイエリー・モーニエ（著者はモーニエと表記）である。モーニエについて、著者が注目するのは、「国民革命」ということばが、占領期に書かれた著作を戦後に再録した際に別の言葉に置き換えられている点である。すなわち、「国民革命」があればヴィシー政府の中心スローガンとして宣伝されたにもかかわらず、それがいとも簡単に他の言葉に置き換え可能であったということである。そして、モーニエ自身の政治姿勢については、青年右翼として「革命」をめざす過激なイメージのある三〇年代にあつても、「革命は国民的であるべき」というバランス感覚あるいは相対主義に基づいており、それはヴィシー期の「国民革命」の論理に容易に結びつくという。したがって、そもそもモーニエにとつて、「国民革命」は彼特有のバランス感覚の産物に過ぎず、戦後においてそれが「フランスの再建」という言葉で置き換えられたのも、「時代に迎合した知識人」の安易な態度に過ぎないと断定している。

三番目に扱うジャック・ドリオは著者も認める通り、知識人というより政治的活動家である。しかしながら「ベタン元帥の部下」を自称するドリオについても、対独協力派の「国民革命」言説として検討の価値があるという。ドリオのようなパリを舞台に占領軍との「対独協力」に奔走していた人物の唱える国民革命は、当然マシスやモーニエのようなヴィシー派とは異なっている。一

九四〇年十月のベタン・ヒトラー頂上会見、いわゆるモントワール会見以降、「ヨーロッパの協調（＝対独協力）」とセットにした形で、「国民社会革命」を推進するドリオの方向性は、当初から前者に比重が置かれていたが、時間と共に、後者は後景に退いていく。ただ、国民革命がドリオにとって「政治的打算」の側面が強かったとはいえ、反資本主義、反民主主義、反議会主義それに農業労働重視といったドリオの思想は、ヴィシーの「国民革命」の内容と完全に符合すると指摘している。

第三章では、第二次世界大戦後の「国民革命」をめぐる言説が検討されている。最初に、アンリ・ルソーを下敷きに、戦後フランスにおける「ヴィシー症候群」が跡付けられているが、これはすでに、わが国でも紹介されて久しいテーマである^⑤。次いで、研究史としての「国民革命」論が詳細に紹介されている。近年のわが国でのヴィシー期研究にさいしては、パクストン以後つまり一九七〇年代以降の研究史を注目するのが常であったが、川上氏は、同時代人の証言であるデムーランやロベール・アロンだけでなく、フランス人としては先駆的な研究者アンリ・ミッシェルやイヴ・デュランも積極的に紹介している。そしてパクストンに代表される外国人研究者の参入によって活発化する以前から、実態としての「国民革命」研究が進展していたことを跡付けている。デムーランのように「国民革命をフランス革命の伝統に位置づける」という、著者自身戦後からの「改竄」と認めるような議論を紹介することには疑問が残るが、ロベール・アロン以来のフランス人自身による「国民革命」研究の系譜に光をあてた労は多し。ただし、総体としてのヴィシー体制を議論するには、「国

民革命」と並んでヴィシーの政策のもう一つの柱であった「対独協力」への注目が不可欠であり、こちらの側面については、パクストンはもちろん、イエツケルやミルワードなどの外国人研究者の登場を待たなければならなかったことは間違いない。

第四章は、本書の副題ともなっている「ナシヨナル・アイデンティイ」の視点でのヴィシー期の考察がなされている。まず歴史家マルク・プロックの遺書とも言うべき『奇妙な敗北』の中にユダヤ人プロックのフランス人としてのアイデンティイを読み取り、ナシヨナル・アイデンティイの危機の時代としてヴィシー期を捉える、近年のピエール・ラボリヤやフランソワ・ペダリダの研究を紹介している。次いでアイデンティイ危機がもつとも典型的に表れた、いわゆるリオム裁判が詳細に分析されている。フランスの敗北の責任者を、ブルムやダラディエら第三共和制の政治家たちに負わせるという意図で一九四二年に始まったこの裁判は、ヴィシー政府の正統性を裏付けるという当初の意図とは裏腹に、ヴィシー政府にとっても占領当局にとっても不都合な展開となり結局中止に追い込まれている。まさに著者が指摘する通り、リオム裁判は、フランス国民の統一をはかる意図で企図されながら、逆にフランスの分裂を内外に露呈する結果となったのである。ナシヨナル・アイデンティイを強化しようとしながら、ナシヨナル・アイデンティイの危機を深める状況は、国民の統一のために提唱された「国民革命」が挫折する姿の「同じ歴史的現象の別の表現」であったと著者は、本書を結んでいる。

つぎに本書の形式と内容について立ち入った批評をしてみよう。

まず全般的な形式について述べてみよう。本書は、序章をのぞけば専門的な既発表論文をもとに書かれているが、そのわりにはフランス史の知られざる側面を紹介するという姿勢で貫かれているため、全体的に読みやすい筆致が印象的である。しかしながらそれゆえにこそその不満もある。つまり、概説書的スタンスでの専門的内容の紹介という著者の意図が必ずしも成功しているとは言えないからである。まず全体の構成であるが、おそらく書き下ろされた序章は、全くの門外漢の読者を対象に書かれているのは理解できるが、しかし、渡辺和行氏や長谷川公昭氏のような先駆的紹介者の存在をさしおいて、少なくとも彼らより専門的な視点を提供することを企図されているはずの本書の導入で「日本ではヴィシーの存在の意味があまりにも見落とされている」と断定するのは如何かと思われる。また、本書では随所でフランスを始めとする最新の海外の研究成果が盛り込まれているが、それらの紹介の仕方にも問題がないわけではない。特に、本書の中心テーマ「国民革命」をめぐる言説の一環として、研究史を紹介している第三章の後半部分は、専門書としてであれば、当然本書の冒頭に置かれてしかるべきだと思われる。同時代人、さらには戦後のフランス人の意識と、研究者の解釈とを同列に紹介することに違和感を覚えたのは評者だけではあるまい。これは、「国民革命」についての情報が多いにも関わらず、著者自身の「国民革命」像の位置づけが読み取りにくいという印象にもつながっている。少なくとも構成上は、近年フランスだけでなく、わが国においても占領期のフランスの紹介が少なからぬ現状を認めた上で、本書の主題を説明するという構成が望まれたのではなからうか。

次に内容については、本書全体の中で中核的な部分を構成し、また著者のオリジナリティーがもつとも發揮されていると評価できる、第二章の最初の二人の知識人論に絞って見てみよう。とりわけアンリ・マシスについての分析は文学研究者としての著者の真骨頂で、フランス保守派知識人研究に貢献するところ少なくとも、正当なベタン派知識人としてのマシスの軌跡は、そのまま、保守派知識人の「国民革命」の知的格闘に重なっている。著者の目配りは、マシスのモース流政治評論だけでなく、ブルーストやジッドと対決した、文芸評論家としての側面にとりわけ生かされており、結論をカトリシズムへの収斂に単純化している印象もあるものの、文学研究者としてのありうべき歴史研究への貢献として高く評価できる。ただし、細かい事実関係だが、「マシスが（ベタン政権の）青少年担当相として入閣」（九三頁）は *Chaban-Desmoulins*（特命官吏）を、著者が勘違いされたのであろう。

これに対して、マシスに比べ、彼の弟子筋のモーニエについては、より政治思想的側面が強い人物ということもあり、著者の手に余っている印象は否めない。保守派、ヴィシー派としての筋を通したマシスに比べ、毀誉褒貶の激しかったモーニエについて、著者が伝記作家から引用する「バランス感覚」で説明したくなる気持ちもわからないではない。実際、著者がまさに「発見」とおり、言葉としての「国民革命」は、戦後見事に他の言葉で置き換えられてしまったのである。しかしながら、モーニエにおける「国民革命」の言説を分析するのであれば、占領期、戦後の保守派として連続性だけでなく、三〇年代の「国民革命」と占領期のその間の断絶の側面も無視することはできない。三四年二月

六日以後の左右両極化の中でモーニエが果たした役割は、決して「バランス感覚」だけでは説明できないはずである。二月六日直後にモーニエが仲間と共同執筆した『明日のフランス』で語られる「国民革命」は、限りなくファシズムに近い響きをもつものがあり、マルクス主義にも多くを負っているモーニエの「革命」志向は、『ナシヨナリズムを越えて』で集大成をなしている。著者は、社会主義革命をも参照するモーニエを一貫してバランス感覚で説明しているが、そもそもナシヨナリズムと社会主義の統合という意味での「国民革命」はフランスのオリジナルではない。少なくとも一九三〇年代には、イタリア、ドイツそしてスペインにおいて、それがファシズムを意味する共通の言説であったことが見落とされているのである。

以上、構成、内容それぞれにおいて評者が感じた批判的感想を述べたが、本書が文学研究者の歴史研究への貢献であることは間違いない。川上氏がエピソードで述べているように、大切なのは「歴史に向きあう姿勢」であり、政治家が「ヴィシーはフランスを否定した」と断定して満足するのと一線を画すべきであるという主張には、評者もまさに同感である。フランスにとって国民革命とは何であったかを問うことは、過去を直視することを避ける傾向が年を追うごとに増大するわが国にあっても決して他人事ではない。今後は、歴史研究、文学研究双方から、保守派知識人研究のような共通の土俵で生産的な議論ができることを願ってやまな

い。最後に訳語についてであるが、「国民会議」、「軍人同盟」など違和感を覚える言葉が散見されるが、これとても、共通の土俵作りを怠つてきた評者自身への自戒をこめて指摘しておきたい。

① 長谷川公昭「ナチ占領下のパリ」草思社、一九八六年。藤村信「夜と霧の人間劇」岩波書店、一九八八年。渡辺和行「ナチ占領下のフランス」講談社、一九九四年。

② 福田和也「奇妙な虚脱」国書刊行会、一九八九年が先駆的業績であるが、以後同じ出版社からは、セリヌ、ドリユ・ラ・ロシエルら対独協力作家の作品の翻訳も出版されている。

③ 剣持久木「占領期フランスにおける保守派知識人—ヴィシー派知識人と「国民革命」をめぐる—」『史学雑誌』一〇六編六号、一九九四年。

④ 非順応主義者については、下記の拙稿を参照されたい。剣持久木「フランス・ファシズム再考—コンバ誌とフランス青年右翼—」『紀尾井史学』一四号、一九九四年。

⑤ 渡辺和行「ホロコーストのフランス」人文書院、一九九八年。剣持久木「記憶の義務」と「忘却の権利」—フランスの戦後五〇年と占領期—」『季刊戦争責任研究』八号、一九九五年。

⑥ 『明日のフランス』*Demain la France*の分析については、下記の拙稿を参照されたい。剣持久木「フランスナシヨナリズムと保守派知識人—ティエリー・モーニエと一九三四年二月六日事件—」『名城商学』第四八巻別冊、一九九九年三月。

(B6判) 三〇六頁 二〇〇一年二月 藤原書店 三六〇〇円+税)